

パートナー探しは海外で

岡 奈津子

先日、カザフスタンの友人Oが離婚した。彼ら地ではよくあることで、私の友人・知人を思い浮かべてもバツイチは(再婚した人も含めれば)ざっと過半数を超えているし、中には離婚を三回、四回と繰り返し強者もいる。だから離婚自体は驚くに値しないのだが、夫婦仲の良さをアピールしていたOが夫と別れる決断をしたことは私にはやや意外だった。

Oは五〇代のジャーナリストで、(元)夫も同業者である(ちなみに彼は今回の離婚でバツヨンになった)。夫婦そろって新聞社やラジオ局で活躍していたこともあったが、マスコミに対する政権の締め付けが強まると、御用ジャーナリストになれない彼らは失職を余儀なくされた。その後、Oはロシアの通信社や欧米の報道機関の仕事をいくつか家計を支えてきたが、夫はずっと無職。多忙な彼女に代わって家事をこなすわけでもなく、妻に依存して生活していた。

無論、Oの夫の失業はジャーナリストとしての

信条を貫いた故のものであり、彼が根っからの怠け者というわけではない。だが、私が知る彼は、家でごろごろしたり友達と呑みにいたりするだけで、仕事を探している風には見えなかった。私は現地調査でしばしばOの世話になったのだが、我々二人が作業しているところへ彼がやってきて、「コーヒー淹れて」とせがんだのには心底呆れたものである。しかしOは私に、夫がどんなに魅力的な人物で、彼女たち夫婦がいかに愛し合っているかをいつも強調していた。

離婚報告のメールを受け取ったときには、さすがのOもついに堪忍袋の緒が切れたか、と思った。ところがメールを最後まで読んでさらにびつくり。なんと彼女の夫は、すでに別の女性と同じ市内で同居しているというのである。Oが夫にどれだけ尽くしてきたかを知る私は、彼女の心中を思うといたたまれなかった。ただ彼女自身が「離婚は私が言い出したこと。後悔していないし、彼に腹を立ててもいない」と書いていたことに、少しだけほっとした。

カザフスタンでは、パートナー探しに苦労するのは女性のほうだ。女性は適齢期とされる一〇代末〜二〇代前半を過ぎると嫁ぎ遅れ扱いである(日本でも独身女性が二五歳を超えると「売れ残りのクリスマスケーキ」と言われた時代があったが)。上述したように離婚はざらだが、私の周囲を見渡しても、男性はすんなり再婚する人が多いのに対し、女性はなかなか難しい(もちろん結婚はもうまっぴら、という人もいるだろうけれど)。Oのオフィスで会計を担当している女性は、背が高くすらりとした美人である。歳は三〇くらい

だろうか。男の子を一人で育てているが、新たに伴侶を見つけようと、ネットでの婚活に挑戦しているそう。しかし、これという相手に巡り会えない。彼女の母親は私に「男が女より少ないから仕方がない」と嘆息する。

実際はどうなのだろう。カザフスタン共和国統計庁によれば、人口二〇〇〇人あたりの婚姻率(二〇〇九年)は、男性が一八・四人、女性は一七・〇人。男性一〇〇〇人あたりの女性の数(二〇一〇年)は、三〇歳以下では二〇〇〇人未満だが、三二歳以上になると増え続け、三〇〜三四歳で一〇二一人、三五〜三九歳で一〇四八人、四〇〜四四歳で一〇八二人、四五〜四九歳では一二三人となる。

未婚率(以下のデータは一九九九年国勢調査による。二〇〇九年国勢調査結果の詳細は未公表)は男女間で顕著な違いはないものの、三〇〜四〇代の離婚によるシングルの割合は、男性六〜七パーセントに対し女性一〜二パーセント。都市部に限れば八〜九パーセントと一五〜一六パーセントという開きがある。さらに男性の寿命が短いので寡婦が多い。これらの数字から見ると、年齢を重ねるほどパートナー探しは女性に不利になる。男性に年下の女性を好む傾向があることを考慮するとなおさらだ。

さらに別の友達曰く「ただでさえ男不足なのに、まずアル中は論外でしょ。そこから無収入の男を除いたら、結婚したいと思う相手は本当に少ない」。カザフスタンでは日本と同じく、それ以上に性的役割分業意識が強く、男は稼いでナンボと思っている女性が多いのだが、男性のほうもそ

おか なつこ/アジア経済研究所 地域研究センター研究員

専門はカザフスタン政治、ナショナリズム論。

1998-99年 コロンビア大学ハリマン研究所客員研究員(ニューヨーク)、1999-2001年 カザフスタン発展研究所客員研究員(アルマトウ)、2008年英国リーズ大学政治国際関係学科博士号取得。近著に「同胞の『帰還』: カザフスタンにおける在外カザフ人呼び寄せ政策」『アジア経済』第51巻6号、2010年などがある。

のほとんどが、家事・育児は女性がやってあたりまえと考えている。その結果、学歴が高く収入も多い女性はとくに、パートナー探しに苦労する。

そんな高学歴・高収入女性の典型である銀行員の友人は、カザフスタン国内で結婚相手を見つけるのはあきらめ、トルコのリゾート地でイケメン男性をゲットした。彼は言葉の問題もあり定職には就いていないが、幼稚園児の父親としてイクメンぶりを発揮しているらしい。

実はOの話には後日談がある。このたび、現地調査の際に彼女と会うことができたのだが、なんと離婚後早々、新しい出会いがあったというのである。お相手はカザフスタン出身だが、長年ヨーロッパに住んでいる年上の建築家。悠々自適の年金生活を送っており、近々彼女を呼び寄せて正式に結婚する予定だとか。今やカザフスタンのデキル女は出合いを海外に求めるのか。ともあれ、Oの幸せを心から願う私である。

